アスペルガー症候群を考える　－その１－

◇会話はできるけれど…

アスペルガー症候群は、前号で紹介した注意欠陥/多動性障害（ＡＤＨＤ）と同じように、中枢神経系の機能がうまく働かない状態が推測される軽度の障害です。ＡＤＨＤと同じように、障害がなくても成長過程で類似の状態を示す児童生徒もあり、診断名を安易に使うことは慎まねばなりません。

自閉症に見られる主な三つの障害(社会性、コミュニケーション、想像力と行動)のうち、コミュニケーションの障害が軽度なグループです。知的発達や言語の遅れは少なく、通常の教育の場での学習がほぼ可能ですが、下記のすべてか、またはいくつかの特徴をもつため、社会性の育ちに難しさがあります。

○会話はできるが、冗談やニュアンスを理解しにくく、やりとりがぎくしゃくし、対人関係がスムーズでない。
○興味を示す対象が著しく偏ることがある。(標識、乗り物、時刻表、天気予報、図などのカタログ的な知識等)
○記憶力は驚くほどよいが、かなり以前の迫害された状況を突然思い出し、その場を無視して怒るので、理解しにくいトラブルを引き起こす場合がある。
○目立たないが、同じ動作や仕草を長時間繰り返していたり、儀式的な行為や自分の世界に没頭したりしていることがある。
○圧迫刺激や特異な手触りなどを好む反面、握手を嫌うなど触覚過敏や、特定の音を嫌う聴覚過敏が見られることがある。　など

◇理解しにくい対人関係

他者の心理を読み取って行動する力については、障害のない場合よりもかなり遅れて獲得し、なおかつ、読み取りに苦労していることが確かめられています。この力を獲得する前後にいじめられる体験や失敗体験が続くと、対人関係を被害的に読み誤り、不可解な行動を繰り返すことになるのです。

アスペルガー症候群の児童生徒は、周囲の理解を進め、かかわり方を工夫することが大切です。

総合教育センターだより第６９号より